

うね ちよう
畝 傍 町

地下深く眠る檀原遺跡

神武天皇の即位した所を日本書紀が「畝傍山の東南檀原の地」と、古事記が「畝火の白檀原の宮」と表しています。また畝傍山が「雲飛山」「雲根火山」などとして、最古の歌集・万葉集にも登場しています。

この畝傍山の東南一帯で昭和一三―一五年に発掘調査が行われ、この地が縄文時代後期後半から晩期後半にかけての、西日本を代表する縄文遺跡だったことが分かりました。

当時の縄文時代に檀原遺跡で作った「檀原式土器」が近畿一円から関東地方まで分布し、逆に青森県や岩手県で作られた土器多数が当地へ入ってきています。

このような全国ネットの幅広い地域交流を考え合わせますと、畝傍山の東ふもとに広がる畝傍町一帯が、いずれにせよ古代日本の中心的な土地だったことは、全く疑う余地がありません。

発掘調査が終わって「檀原遺跡」と呼ばれることになった同遺跡は、県立檀原公苑内にある陸上競技場と野球場あたりの地下一帯に、縄文時代の遺構と歴史を抱いたまま深く眠っています。